

山歩き検定

5月28日朝、ベットを抜け出し、居間のテーブルでコーヒーを飲みながら、テレビのモーニングワイドを何気なく見ていた。各新聞の朝刊から、コメンテーターがヤジ馬的に話題を拾って、視聴者に伝えるコーナーがある。タレントの誰と誰が破局だの、ナンダラカンダラといった内容で、ほとんど聞き流しならぬ、目流している。

「中高年登山がブームです」といったような言葉が耳に飛び込んできた。瞬時、体が反応して目と耳が画面に集中した。

朝日新聞の朝刊からの話題の提供だった。中高年登山者を対象にした「秩父安全山歩き検定」が6月28日に埼玉県警秩父署で実施されるという。コメンテーターが、「山は中高年登山者ばかりのようですね。若い人がもっと登ればいいのに」と、発言していたのをソーダ、ソーダと聞きながら、ポストから定期購読している朝日新聞を取って来て、テーブルの上に広げた。

「秩父登山『甘くみないで』』という惹句に続いて「中高年に『山歩き検定』』という見出しが大きく目に飛び込んできた。

首都圏から近く、北アルプスなどのように急峻・危険というイメージを抱かないため、気軽に入山してくる中高年が多いが、イメージとは裏腹に急峻で沢が深く、遭難者も少ないという。

「07年には山岳救助隊は31日出動し、5人が死亡、34人が救助された。遭難者を年代別にみると、30代までが6人で、残る33人(85%)が40歳以上の中高年者だった。また、20日までの今年の遭難は13件15人で、ほぼ全員が50歳以上、最高齢は75歳だった」とある。

山岳救助隊の副隊長である飯田雅彦氏は、①地図を持たないなど、基本に無知。②経験があっても、同行型のため技術が未熟。③体力の衰えを自覚していない……と、中高年の遭難を分析されている。

こうした分析結果をふまえ、遭難防止を目的として、検定制度を発足させることになったそうだ。登山関連の検定は全国でも例がないというが、面白い試みだと思う。四者択一式で50問あり、40問以上正解が合格、「認定証」が交付される。「不合格者の登山を禁じたりすることはない」とあった。

実際、国土地理院発行の地形図か市販のガイドマップも、コンパスも持たず、ガイドブックのコピー片手の登山者が増加している。昨今、道迷いが転倒滑落に並んで遭難原因のトップだというのが、地図もコンパスもなしでは当然であろう。

同行型のため技術が未熟、というのもその通りだと思う。特に判断力・決断力がトレーニングされていない。その部分をリーダーに委ねてしまうからだ。

会員諸賢にお勧めしたいのは、「山の遠足」に一度参加したら、同じコースを仲間を誘って、自力で登山してみる。高尾山や石老山など小さな山でもいい、自分がリーダーで登ると、充実感が違ってくる。